

保育者養成としての ダンス教育に関する一考察

若松美恵子

1. 研究目的

保育者は、子どもと共にのびのびと動け、しかも新鮮な感受性と創造力を備え、自主的、創造的に動けることが望ましい。

保育者養成は、短い教育年限で指導に必要最小限の時間しか与えられない。一方現場での在職期間は比較的短い。従って現場ですぐ自ら動け、指導できるでたてを知らせることが必要と考える。そこで保育者養成としてのダンス教育の中で、「自ら動ける身体づくり」をめざして目標を次の4点にしぼった。

①運動の極限まで身体をのびのびと伸ばし、リズムカルに動けるようにする。

②自分で多様な動きを豊富にみつけ、動けるようにする。

③動きの連続がなめらかで、かつ起伏をもった、ある感じをとらえた一連の動きを創れるようにする。

④表現したいものになりきって動き、身体で表現できるようにする。

以上の目標を達成するために指導内容・方法を検討し、その有効性を学習者の意識の変化から明らかにする。

2. 研究方法

(1)授業計画とその実施

〈対象〉白梅学園短期大学 2年 47名

〈実施期間・時間〉昭和56年10月～12月 7時間

〈授業の実施〉授業の初期の段階で、身体のどこをどのように動かすかを理解させる為に、身体の部位や運動の種類に着目して、身体の可動範囲や動きの種類を拡大をはかる。

2, 3の運動の種類を選んで運動課題とし、運動課題から表現へ、表現素材から運動課題へと一授業ごとに完結する指導を行い、グループによる小作品づくりを実施した。これらから一応動きの開発。動きのとらえ方、動きの表わし方、動きのはこび方を学習させる。最後に運動課題から「ある感じをとらえた一連の動きづくり」を課題としたテストを個人で実施し、評価した。これらの内容を指導方法として次の点に留意しておこった。

①考え込み、座りこんでしまわないですぐに課題解決ができるよう、課題や助言を具体的で、必要最小限にとどめる。

②毎時間、少人数グループの中で、個人が責任もって動きづくりをする場を頻繁に作る。

③学習の過程で友達の動きを互いにみて、一緒に動くことをくりかえし行う。

(2)学習成果の判定

①学生の高校時のダンスに対する意識

②学生の毎時間の学習記録(学んだこと、反省、感想)

③テスト終了後の「自ら動ける身体づくり」に関して、向上したと考える点についての記録

3. 結果と考察

(1)学生の毎時間の学習記録をみると、①運動の極限まで身体を動かす大変さと快よさを感じとっている。又、リズムカルに動くことの楽しさを味わっている。②身体のどこかをどのように動かせば動きができてくるかの方法を知り、動けない意識から自分も動けるんだという意識に変わった。③表現素材をどうやって動きにするのか、更に変化、発展させる方法が理解されてきている。④表現素材と運動課題を密着させ、動くことを重視して指導を展開したため、イメージから動きへの取り組みを容易にさせ、考え込むことも少なく、くり返し動く中でイメージを固定させ、小作品づくりができた。⑤そのものになりきって気持ちを入れて踊ると、表現力が増すことが理解されてきている。

(2)高校時のダンス学習経験については、有経験者40名、無経験者7名であり、有経験者の内、好嫌について、普通が32.5%、やや嫌いは45%、非常に嫌いは12.5%であった。そしてその理由については○因子がほとんどであった。理由を大別すると、①身体の動かし方について、②イメージを動きや作品にする方法について、③動きや踊りを観られることについてであった。これらのダンスに対する○イメージが、本指導結果「自ら動ける身体づくり」について自分が向上した点から明らかのように次の如く意識が変化した。①のびのび一杯動けるようになり、思いきり身体を動かした時の充実感や喜びを体験している。②身体の部位や運動の種類を学ぶことによって動きの範囲が拡がり、自分で工夫して動きをみつけ動けるようになっている。③イメージを動きや作品づくりにする方法が理解され、創作の楽しい経験をしている。④皆で協力して創作したり、やりとげる楽しさや喜びを体験している。以上のことから「自ら動ける身体づくり」をめざした本指導内容は、学生の可動範囲が拡がり、身体の動きにめざめさせ、楽しみながら目標はある程度達成できたと考える。さらに学生達の今後の課題からは、今後の自己研鑽と幼児教育での身体表現の実施の意気込みをうかがい知ることができた。